

国立国語研究所学術情報リポジトリ

文献レビュー5

小柳正司(2010)『リテラシーの地平：読み書き能力の教育哲学』

メタデータ	言語: 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2023-11-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福村, 真紀子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000102

小柳正司 著

『リテラシーの地平：読み書き能力の教育哲学』

大学教育出版、2010

福村 真紀子（茨城大学）

監修：角 知行

2023年10月31日

①問題提起

「私たちは文字と学校と教育の一体性を疑わない」（p.1）と筆者が述べるように、学校教育で「読み書き能力」が養成されることは暗黙の了解となっている。筆者は、「読み書き能力」は「識字」という用語に置き換えられるが、筆者は「識字」を単なる識字術ではなく、「文字文化の内面化」として機能すると論じている（p.19）。「リテラシー」は「識字」と同義語であり、「リテラシー」についても単なる読み書き技能ではなく、「文字によってものを考える精神」（*literate mind*）であると述べている（p.19）。

筆者は、リテラシーの捉え方に問題を見出している。そして、イリイチ（1987）¹によるリテラシーについての見解に基づき、「レイ・リテラシー（一般人のリテラシー）」という概念を取り上げる。「レイ・リテラシー」とは、読み書きの行為そのものではなく、「ひとたび文字に書き記されるようになった言葉が、今度は人びとの精神生活全般を支配する範型となって、文字文化の強大な精神空間を創り出している状態」（p.24）を意味する。つまり、「ものを考えたり話したりするときいつも心が文字に向かう精神の機制」（p.39）である。

本書が提起する問題とは、リテラシーの捉え方と学校教育におけるリテラシー教育のあり方である。

②なぜその問題が重要か

筆者は、「リテラシーの普及をそれ自体で善であり進歩だと考えるのは単純すぎはしないか。なぜなら、非識字者の識字化を無条件に望ましいことだと考えるまさにその瞬間、われわれは自分たち識字者が抱えている問題を免除してしまうからである」（p.21）と述べ、識字の問題はむしろ識字者に存在すると論じる。それは、「識字の暴力」という言葉で説明できる。筆者は、イリイチ（前掲）の議論を取り上げ、「われわれは、文字を修得し、読み

【文献レビュー5】

書き能力を獲得することは、誰もが身につけるべき文明社会への入場券だと考えている。だが、実はそのこと自体が非識字者に対する「識字の暴力」なのだということに気がつかない」(p.45)と論じている。本書が問題提起するリテラシーの捉え方と学校教育におけるリテラシー教育のあり方は、「識字の暴力」をいかにしてなくすかという一つの目標と連携しているのである。

③問題解決の方法

筆者は、ウィリアム・グレイの「機能的リテラシー」ⁱⁱという概念を紹介する。「機能的リテラシー」については、「機能的に識字能力のある人とは、彼の文化または集団において読み書き能力がごく普通に前提とされるあらゆる活動に彼が従事できるための読み書きの知識と技能を持っている人である」(p.60)という定義が示されている。グレイの意図は、「識字教育は単に日常生活の直接的な必要(needs)を満たすためだけではなく、学習者の読み書き能力の成長とともに「社会参加」への要求に応えるより高いレベルの読み書き能力をも視野に入れるべきである」(p.61)というもので、「既成の社会や職業構造の要請に応えることを優先する性格のもの」(p.62)を超える画期的な概念であった。しかし、1950年代に発展途上国や新興独立国を中心になされたユネスコの識字政策には正しく生かされなかったと筆者は論じる。「機能的リテラシー」は社会参加ではなく、「経済開発のための人的資源の確保という発想が色濃く投影されていた」(p.67)のである。

グレイが生んだ概念が歪められしまった「機能的リテラシー」に対抗する識字教育として、フレイレの識字教育ⁱⁱⁱが論じられている。フレイレの識字教育が既存の識字教育と異なる点としては、「非識字者を識字学習の客体ではなく主体と位置づける点」(p.99)である。「学習者自身が自らの言葉を発するようになること、そして自ら世界を命名すること」(p.99)がその目的である。フレイレは、文字の獲得は現実世界の「意識化」と同時に起こると考え、「対話」を重視した。フレイレの「対話」とは、「共通の課題に取り組む者どうしの知的共同作業における交流」(p.115)を意味する。そして、教師の役割は、「学習者がおこなう知識の生産と再創造の活動(探求)を組織しながら、彼らが所与の直接経験を超えていくように促す媒介者」(p.117)である。「識字の暴力」を回避するには、学習者を主体として位置づけ、教師が媒介者となって学習者が現実世界を「意識化」し、文字を獲得するように導くことが一つの方法と考えられる。

また、筆者は、ハーシュの「文化的リテラシー」^{iv}を取り上げている。ハーシュによる「文化的リテラシー」の考え方は、「一般にリテラシーの水準は単に読み書きの技能にどれだけ熟達しているかによって決まるのではなく、読み書きを遂行するのに必要な「背景知識」(background knowledge)をどれだけ所有しているかによって決まる」(p.125)というものである。この考えは注入主義教育であり、学習は読み書きに必要な背景知識の有無が問題となる。ハーシュは「学校で教えるべきカリキュラムの内容に関しても、アメリカ主流文化の伝統を伝えるものでなければならない」(p.130)と主張する。この主張はWASPを

【文献レビュー5】

アメリカの正統文化と見なす考えであり、文化帝国主義という批判を浴びた (p.130)。

この「文化的リテラシー」への対抗概念として現れたのが「批判的リテラシー」である。「批判的リテラシー」は、「文化的リテラシーが指定 (prescribe) する公認知識の確定的な意味内容を乗り越えていく」(p.150) のものであり、「何よりもまず学習者の興味や関心、彼らの願望や要求にねざしたものでなければならない」(p.150)。「批判的リテラシー」は、「文化的リテラシー」によって正統化された読み書き文化から排除された読み書き文化を比較検討することにより、その排除のイデオロギー的な理由を明らかにすることを課題としている (p.147)。

④結論

「批判的リテラシー」は、フレイレのリテラシー理論に依拠している。筆者が「批判的リテラシーは、抑圧された民衆が自らの抑圧された状況を批判的に読み取り、そこから変革と解放のいくための道具となるものである」(p.155) と述べることから、リテラシー教育のあるべき姿はフレイレの識字教育を参考にすべきという主張が見出せる。また、「正統的読み書き文化をまさに正統なものとして受け入れてきた読者自身の主観性を脱構築することによって、既成の社会的関係構造からの自己解放と新たな意味生成を促そうとする」(p.161) という表現から、「正統な読み書き文化」を疑い、既成のリテラシー教育を批判的に検討することが喫緊の課題であることも理解できる。

⑤誰にとって、どのような成果があるのか

学校教育とリテラシー教育はセットとして考えられているのが現状である。また、リテラシーが社会参加の条件であるというイデオロギーに疑いを持つ人も多くはない。リテラシーとは何を意味するのか、本当にリテラシーがなければ社会参加できないのかという問いには、これまであまり注目されてこなかった。本書は、その問いに真っ向から立ち向かい、文字と学校と教育の一体性に対する固定観念を払拭する立場にある。

本書は、リテラシー教育を行う言語教師だけではなく、例えばリテラシーを雇用条件としている企業など、リテラシー獲得を自己実現の前提とする者たちに、リテラシーそのものとリテラシー教育について再認識する機会を与えることができる。特に、フレイレのリテラシー理論に依拠した「批判的リテラシー」の意義を知ることにより、ある国や地域における非母語話者のリテラシーとリテラシー教育をどのように捉えるべきかを考えるきっかけになるはずである。ある国や地域のマジョリティのリテラシーを学ぶ必要はあるのか、あるとしたらそれはなぜかを問いたださねばならない。リテラシー学習の根本的な意味を考えることなしに、リテラシー教育を誰に対しても強要することはできない。また、リテラシー学習を必要とする場合にも、同化教育的な営為とならないよう配慮すべきである。以上の観点から、本書は教育者やリテラシーに価値を置く人々によるリテラシーの捉え直しに大いに貢献するものと思われる。

-
- i Illich, I. (1956) A Plea for Research on Lay Literacy, In *Interchange*, Vol. 18. Nos. 1/2, Spring/Summer 1987. pp.9-22.
- ii Gray, W. S.(1956) *The Teaching of Reading and Writing: An International Survey*, Paris: UNESCO, p.24.
- iii フレイレの代表的な著作には『被抑圧者の教育学』（小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周訳、亜紀書房、1979年）がある。
- iv Hirsch, E. D.(1983) Cultural Literacy, In *American Scholar*, vol.52, pp.159-169.

本文献レビューは、国立国語研究所共同研究プロジェクト「定住外国人よみかき研究」の研究成果である。また、本文献レビューの内容に対する責任は本プロジェクトが負う。